

一八八四年三月九日(日)

ドゥキネーシヨル
南神村でマニラル・マリツクをはじめとする信者たちと共に

今日は日曜日、キリスト暦三月九日。ファルグン月二十七日。聖ラーマクリシユナは、ドゥキネーシヨル南神寺院で大勢の信者たちと共に坐つていらつしやる。マニラル・マリツク、シンテイーのマヘンドラ・カヴィラジ、バララーム、校長、バヴァナート、ラカール、ラトウ、アダル、マヒマーチャラン、ハリシユ、キシヨリー(・タプタ)、シヴァチャンドラ、その他。まだ、ギリシユ、カーリー、スボドウたちは来ていない。シャラト、シャシーたちも、まだ一、二回来たばかりである。プールナ、若いナレンたちも、まだこの頃はタクールにお会いしていない。

聖ラーマクリシユナは、腕に副木を当てて包帯をしておられる。鉄柵のところで転んだとき、腕を骨折なさつたのだ。そのときは靈的恍惚状態で歩いていらつしやつたのである。腕は絶えずお痛みになるらしい。

しかし、このような状態にあつても、タクールの一日は、大部分を三昧と信者たちに語る深い真理の話とで過ぎてゆく。

ある日などは、腕が痛んで泣いておられるうちに三昧にお入りになった。三昧が止んで平常に戻ら

れると、マヒマーチャランはじめ信者たちに向かってこうおっしゃった。

「バーブ（旦那さん）、サッチダーナンダをつかまなければどうにもなりませんよ。一心不乱にならなきゃだめですよ。わたしや、泣きながら神を呼んで頼んだものだ。『オオ、低いものたちの救い主よ。わたしはロクなお祀りもしないし、修行も足りない人間です。この憐れなわたしに、どうぞ会って下さい』と言って——」

その日の夜、再びマヒマーチャラン、アダル、校長たちが坐っていた。

聖ラーマクリシュナ「（マヒマーチャランに）無条件の信仰というのがあるが、これは願ひ事や私欲を超えた信仰だ。お前、これが出るか？」

（アダルに向かって）この腕をちよつとさすつてくれないか？」

マニラル・マリックとバヴァナートは、一八八三〜四年にアジャヤ博物館の近くで催された展覧会の話をしている。彼等はこんなことを言っていた——「大勢の藩主たちが高価な貴重品を展示していますよ！ 黄金の寝椅子とか、とにかく一見の価値があります」

〔聖ラーマクリシュナと富、権力〕

聖ラーマクリシュナは信者たちに向かって——「ハッハッハッ、ソーかい。そりゃ行ってみれば、何かタメにはなるさ。そういう黄金で出来た品々、藩主や王家の持ち物などを見たら、嫌気が差すだらうな。それがわかるだけでも、ずいぶんタメになるよ。」

いつかカルカッタに行ったとき、フリダイがイギリス総督の邸を見せてくれた。『見て、伯父さん！あの大きな柱が並んでいるのが総督の屋敷ですよ』マーはそれが、レンガの積み重ねだということを見せて下すったよ。

至聖と至聖の力の現れだ。力の現れは二日ばかりのもの、至聖だけが真実在だ。魔術師と魔法だよ！魔法を見てみんなびっくり仰天するが、あれはみんな錯覚で、魔術師だけがそこにいるんだ。旦那様と旦那様所有の庭園。庭園を見学したら、持ち主の旦那を探さなけりやいけない！

マニラル・マリツク「(聖ラーマクリシュナに向かつて)それから、大きな大きなエレクトリック・ライト(電灯)がついています。あれを見ると、あんなエレクトリック・ライトをおつくりなるあの御方は、ほんとうに偉大だなあとと思います」

聖ラーマクリシュナ「(マニラルに)また別な考え方だと、あの御方がそういうものすべてに成っていらつしゃるとのこと。そう言っている人自身もあの御方——創造者、現象、^{マニヤ}生き物、世界……」博物館の話になった。

〔聖ラーマクリシュナと聖者との交わり——ヨーギーの絵〕

聖ラーマクリシュナ「(信者たちに向かつて)わたしも一度、博物館へ行つたことがある。動物が石になってしまったのを見せてもらった——化石なんだよ。あれを見て、ッいつしよに居る」ということがどんなに効能があるかよくわかつた！あれと同じように、いつも聖者との^{サード・サンガ}交わりを持つてい

れば、だんだんその通りになっていくんだよ」

マニラル・マリック「はっはっはっは。あなた様が一度いらっしやれば、私どもにとつて十年も十五年分もの教えがいただけただけなことでしょうに」

聖ラーマクリシユナ「ハハハハ、なに、たとえ話のネタとでも言いたいのかい？」

バララーム「いけません。あちこちにいらっしやると腕がよくなりません」

聖ラーマクリシユナ「わたしは、絵が二つほど欲しいんだがね。一つはヨーギーが火を燃やして坐っている絵。もう一つはヨーギーが大麻の芽を吸うのに火がパツと燃え上がっている絵。

こういう絵で、とても意識が上昇するんだよ。ちようど作り物の果物を見ると、本物の果物を思い出すようなものでね。

とにかく、ヨーガの障さわりは女と金だ。この心が清き浄よまればヨーガに成功する。心の座は眉間アジナー！チャクラクなものに、生殖器やヘソにばかり目を向けている——つまり、女と金にさ！修行すれば心が上向きになる。

どんな修行すれば心が上向きかな？ いつも聖者サードゥッ・サンガとの交わりを持っていけば、何もかもわかつてくる。

見神者リたちはいつも独りシでいるか、さもなければサードゥたちといっしょに暮らしていた。だからあの方々は、易々と女と金を捨てて、神に心を合わせなすつたのだよ。人から批難ヒナンされたり、何の心配も恐れもなかった。

離欲ができるように、力強さを神様にお願ひすることだ。間違いだとわかつたら、すぐさま捨てることだ。

見^リ神者^シたちにはこの力強さがあつた。この力で、見^リ神者^シたちは官能の誘惑に勝つたんだよ。

龜は手足を内に引つ込めると、甲羅を四つ割にされても手足を外に出さない。

俗人は不誠実でするいね。正直に、素直になれないんだ。口先では神に関心がありそうなこと言っているが、その実、儲け仕事や女と金にべつたり引かれてる気持ちの、ホンのひとカケラでも神の方に捧げようとしな。それでも、口では神を愛しているようなことを言う。

(マニラルに向かつて) ずるい心(口と心が違うこと)を捨てろ！」

マニラル「人に対してですか、それとも神に対してでしょうか？」

聖ラーマクリシュナ「何に対してもさ。人に対しても、神に対しても、ズルイことをしちやいけない。バヴァナートの正直なこと！ 結婚してここへ来て、わたしにこう言うんだよ。『私はどうしてこんなに妻を可愛く感じるのでしょうか？』って。アー！ なんて素直なやつだろう！」

妻を可愛く思うのは何故だろうね？ それが、宇宙の大実母^マの世にも不思議な創造現象^マなんだ。妻のことを、世界でこれほど身近な人間はいないと思つている——自分のもの、生きてる間も死んでからも、この世でもあの世でも。

この妻というものがあるために、男はどんなに苦勞することか。それでも、世界一親身な人間だと思つている。アワレなもんだねえ！ 二十ルピーほどの月給で、子供が三人できて、満足に食わせる

こともおぼつかない。だから、屋根が雨もりしても修繕する費用もない。息子に新しい教科書を買ってやることも出来ず、聖糸を授けてやることも出来ず、こつちへ行つてはハアナ、あつちへ行つては四アナと借り歩いて！

靈的な知識をそなえた妻こそ、まさに「眞の伴侶」の名にふさわしい。夫が神の道に進むのを、目ざましく助けるんだ。一人か二人子供が出来たら、あとは兄妹のようにして暮らしているんだよ！二人とも神の信者で、神の召使いと侍女だ。二人の家庭生活は明知の生活だ。神ひとりだけが自分のもの——永遠に自分のものなんだよ！嬉しいにつけ悲しいにつけ、その御方のことを忘れないんだ。パインドゥの兄弟のようにな」

〔世俗の信者と出家の信者〕

「世俗の連中の神想いはホンの僅かの時間だ。ちようと、熱くした錫すずに水滴が落ちると、ジュウツといつてすぐ乾いてしまふが、あんなものだ。

俗世の人たちは、この世の楽しみのことばかり考えている。だから、神に憧れたり、神を求めて焦ヒれたりしない。

エーカーダシーにも三通りある。第一のは水断ちエーカーダシーで、水さえ一滴も飲まない。これと同じように、遊行僧フアキールはこの世の一切の快楽を捨てている。第二は牛乳とサンデシュだけは食べてもいいエーカーダシーで、これは家にちよいとしたりした楽しみを持つている信者のようなもの。三番目はル

ちとカレーを食べるエーカーダシー——腹いっぱい食べて、おまけに残ったルチを二枚ほど牛乳にひたしておく。後で食べるつもりなんだ！（訳註、エーカーダシー——新月および満月から十一日目、信者は一日の全部、または一部を断食し、祈り、礼拝をして過ごす）

表向きは霊の修行をしていますが、内心では女と金のこと、この世の楽しみのことを思っているようでは修行はうまくいかない。

ハズラーはここについて大いに称名誦経などをしていたが、家には女房子供がいるし、土地もあるしするので、そういうことをしながらも、かげではプローカーもやっていた。こんな連中の言葉はアテにならない。いま魚を食べない、と言っても後ですぐ食べる！

金のためなら、人は何でもするんだね！ バラモンやサードゥに荷物を運ばせることだって、平気でするんだ。

ここにあるサンデシユが悪くなりかかっても、こんな連中にはやる気がしなかったよ。ほかの人の汚いかめから水をもらっても、こんな連中の水がめには手もふれなかった。

ハズラーは金持ちをつかまえては、長々と話をしてきかせるんだよ。それに、その人たちにこんなことを言うんだ——『ラカールやなんかを見てごらんなさい。連中は誦経もしないで、ただアハアハ笑いながらその辺をブラついているだけですからねえ』

山の洞穴に住んで、身体に灰をまぶして（インドにおける苦行者の習慣）、断食したりいろいろ苦行などをしていても、心の中では世俗の思い——つまり、女と金のこと、気が引かれているなら、そんな人

間は浅ましい恥知らずだよ。女と金に関心のない人たちなら、気ままに飲んだり食べたりブラついた
りしていても、恵まれている人と言える。

(マニラルの方を向いて) この人の家にはサードウの絵がないんだ。サードウたちの絵を飾っておく
と、神を想う心が呼びさまされるんだが——」

マニラル「はあ、いえ、ナンディニー(原典註 1)の部屋に信心深い西洋の婦人の絵がございます。お祈りして
いる絵でございます。それからもう一枚——信念の岩山にしがみついている人の絵です。下は底知れ
ぬ海で、もし信念を放したらたちまち底無しの水に落っこちるとい——。

それから、もう一つございますよ。何人かの少女が、花婿が来るからといってランプに油を入れて
坐って待っています。眠ったらさいご、花婿に会うことはできません。花婿というのは神のことだと

説明してござ(原典註 2)います」

聖ラーマクリシユナ「アハハハハ、そりゃ結構だ」

マニラル「もつと他にも絵があります。『信念の樹』、それから『罪と徳』という絵」

聖ラーマクリシユナ「(バヴァナートに) どれもいい絵だよ。お前、見に行け」

しばらくしてから、タクールはおっしゃった——

(原典註 1) ナンディニー——未亡人になったマニラル・マリックの娘でタクールの信者。

(原典註 2) 十処女のとえ話

「ときどき思うんだが——つまり、ああいうものが好きじゃないんだ。はじめのうちは一度、罪、罪と、罪のことを考えたり、何とか罪から自由になろうと思ったりしなけりやいけないが、でも、あのお方のお恵みでいったん愛に目覚めたら、いったん熱い信仰ラウガを持つたら、もう罪も徳も忘れてしまう。そうになると、規則キマリや聖典経文などは遠くに去いつてしまう。後悔するとか、罪を贖あがなうとか、こんな考えはもうなくなつてしまう。

ちようど、曲りくねつた河を通つて、苦勞してたくさん時間をかけて目的地に行くようなものさ。でも洪水になつたときは、真つ直ぐにわずかな時間で目的地に着く。そのときは、地面が竹竿一本ほどの深さの水の底にある。

はじめのうちは、まわり道もするし、苦勞もする。

熱い信仰ラウガに入れば、大そう楽になる。田の稲刈りがすんだ後は、どの方向にでも自由に歩けるようなものだよ。はじめのうちは畦道を通つて遠まわりをして行つたが、今は好きなどころを歩いて行ける。刈り株があるにしても、サンダルを履いて行けば平気だ。識別、離欲、師の教えを信じることに、これを守つていれば何でもない」

〔聖ラーマクリシュナと瞑想ディヤーナヨーガ、ヴィシヌヌ・ヨーガ——無形神の瞑想と有形神の瞑想〕

マニラル「(聖ラーマクリシュナに向かつて)あのを、瞑想をします場合は、どんな規則があるのでしょうか? どこへ心を集中すればよろしいのでしょうか?」

聖ラーマクリシユナ「心臓はすごい効果のある場所だ。心臓で瞑想することもできるし、さもなくば、サハスラーラで瞑想するのがお経に書いてある規則だよ。けれども、お前たちの気の向いたところで瞑想すればいいんだ。どの場所にもブラフマンが満ちているんだから——。あの御方のいないところなどないんだから——。パリ王にナーラーヤナが、三步で天と地と地底を蔽おほってお見せになったとき、どこかに残った場所でもあったかい？ ガンジスの岸辺が神聖なように、どんな汚い場所でも神聖なんだよ。全部がああ御方のヴィラート像なんだ。(訳註、ヴィラート——宇宙全体が神の体)

無形神の瞑想と有形神の瞑想とがあるが、無形の神を瞑想するのはとても難しい。その瞑想をしているときは、見たり聞いたりするのは何でも、消えてしまう。ただ、自己の本性だけを想念おもっているんだ。シヴァはその本性を想念して踊っていないさる。わたしは何たるものだ、わたしは何たるものか」と言いながら踊っていないさるんだよ。

これをシヴァ・ヨーガと言って、この瞑想のときは額に視線を集中するんだよ。これでもない、これでもない(ネーテイ、ネーテイ)と世界を切り捨てていって、自己の本性だけを想念するんだ。

もう一つ、ヴィシユヌ・ヨーガがある。これは鼻の先に視線をやって、半分は外の世界に、半分は心の内奥おほに向ける。形ある神を瞑想する時はこうするんだよ。

シヴァも時々、形ある神を瞑想して踊りなさるよ。ラーマ、ラーマ」といって踊っていらつしやるんだ」

見神後の境地

マニラル・マリックは古くからのブラフマ協会員である。また、バヴァナート、ラカール、校長たちも時々、ブラフマ協会に通っていた。聖ラーマクリシュナは、オームの説明と正しいブラフマン智、ブラフマンを覚った後の境地について話して下さる。

〔アナハタの音と至上地〕

聖ラーマクリシュナ「(信者たちに向かって) 音のブラフマン——見神者や聖者たちは、この音を聞くために苦行をなすつた。成功すれば聞こえるんだよ。ヘソからこの音が自然に湧き上がってくるのがね——これがアナハタの音というものだ。

音ばかり聞いても何になる? と、こういう意見もある。遠くの方から轟きが聞こえてくる。その轟きをたどって行けば海に着く。海があるから轟きが聞こえるんだよ。アナハタのひびきに従って行けば、それが指すところのブラフマンへ行き着く。そこを至上地(原典註)というんだよ。私があるうちは、そこを見ることはできない。私もない、お前もない、一もない、多もない——そこがその覚りなんだ」

〔個我と至上我の合一三昧〕

「太陽と、水を満たした十個のかめを想像してみろ。それぞれの水がめには太陽が映っている！ はじめは、一つの太陽と十の水に映った太陽とが見えている。もし、九つの水がめを割ってしまえば、一つの太陽と一つの映像とが残る。それぞれの水がめは、ひとりひとりの人間だ。水に映った太陽をたどりたどり、真実の太陽のところへ進んでいく。個我ジヴァートマンから至上我パラマートマンへと上がり着く。人が霊の修行をたゆみなくすれば、必ず至上我を見ることが出来る。最後の水がめを割ってしまえば何があるか、そりゃ、とても口でなんか言えないよ！

人間は初め、無智でいる。神を感じることもなく、いろいろな事物もの、多くの事物ものがあると感じている。智識を得ると、生きとし生けるもの、ありとあらゆるものの中に神が在いますと感じる。足にトゲが刺さると、別のトゲを使って刺さったトゲを抜くようなものさ。つまり、智のトゲで無智のトゲを抜くんだ。そして覚智ヴァイジュニキヤナを体得つかむと、トゲは二つとも捨ててしまふ。無智のトゲばかりか、智のトゲもだよ。そうなると、神様と始終話をするようになる。ただ神を見る、というようなものじゃないよ。牛乳のことを聞いただけではまだ無智だ。牛乳を見た人は智識を持つている。牛乳を飲んで体の栄養ソウにして丈夫ツブサになったのが覚智ヴァイジュニキヤナを体得つかんだんだ」

たぶんこれは、ご自分の境地を信者たちにわからせようとしておられるのだ。覚者の境地を説明すること、ご自分の境地を語っていらつしやるのではないだろうか。

（原典註3）音ナドの行き着くところ。賢者は至高なるヴィシシュヌの住居すまいを常に見る。——サンスクリット——

〔聖ラーマクリシユナの境涯——自ら語られた見神後の境地〕

聖ラーマクリシユナは、また信者一同に向かつて——

「智の聖者と覚智の聖者には違いがある。智の聖者は独特のポーズでヒゲをひねりながら坐っている。誰か来ると、『いかがですか、あなた、質問でもありませんか?』と言う。

神様といつも話をしている覚者はまた全然ちがう。時には無生物のようになつたり、食屍鬼ビジャヤダのようになつたり、小さな子供か、氣狂いのように見える。

三昧に入つて外の意識がなくなるから、無生物のように見えるんだよ。

あらゆるところにブラフマンが満ちて見えるから、食屍鬼のようになる。キレイとかキタナイとかの感じが無いんだ。だから子供みたいに、うんこしながらナツメの実を食べたりもする。

糞も小便もない。みんなブラフマンに満ちている。ご飯や豆料理ダールも、何日か後には糞と同じになる。それから、狂人のようにも見える。その人のやる事なす事を見て世間の人は、その人を氣狂いじゃなからうかと思つている。

それから時には、まるで幼い子供のようだ。何の束縛もなく、恥ずかしい、憎らしいもなく、遠慮もない。

見神の後はこの状態になるんだよ。磁石の岩のそばを船が通ると、船のネジやクギが皆ゆるんで脱ぬけてしまうが、ちょうどあんな具合にね！ 神に会ったあとは、情欲や怒りはもう無くなるんだ。

大実母¹カーリーのお寺に雷が落ちたとき、ネジの頭が吹っ飛んでいったのを見たよ。

見神なすつたお人は、子供を産んだりするような創造の仕事はしない。米をまけば稲の穂^ほになるが、米を炊^たいてしまうと、まいても芽が出ない。

見神なすつたお方は、名だけの私^わが残っている。その私^わは、不正(不適切)な行いは出来ない。名だけのもので、ちようどココナツツの枝の痕のようなものだ。枝が落ちて痕だけ残っている」

〔見神後の私^わ——聖ラーマクリシユナとケーシヤブ・セン〕

「(信者たちに向かつて) いかわたしは、ケーシヤブ・センにこう言った——『私^わを捨てろ。私^わが為^しているんだ、私が人を導いているんだ、なんて思っている、その私^わを捨てろ』と。するとケーシヤブは、『先生、そんなことをしたら、団体を維持して行けません』と。わたしは、『悪い私^わを捨てろ』と言った。

神の召使である私^わや、神の信者である私^わは捨てなくていい。悪い私^わがいる間は、神のものである私^わは住めない。

蔵に誰か一人いれば、家の主人も蔵の番は任せておく」

〔聖ラーマクリシユナ——人間活動とアヴァターラの原理〕

「(信者たちに向かつて) なあ、みんな、この腕を怪我したおかげで、わたしの気持ちがあすっかり変っ

できたんだよ。今は、人間の中に神が一番よく現れている、ということをはわからせてもらっている。まるで神様が、『わたしは人間のなかにいるよ。だからお前は、人間たちと楽しく暮らせ』と言っているらっしゃるようなんだ。

そしてまた、あの御方は純粋な信者のなかに一番よく顕れていらつしやる。だから、ナレンドラやラカールたちに、わたしやこんなに夢中なんだよ。

溜め池のへりに小さな穴がところどころにあつて、そこに魚やカニが住んでいる。そんなふうには、人間のなかに神殿がたくさん現れている。

シヤラグラーマ（神体として礼拝される石）より偉大なのは人間だと言われている。人間ナーラーヤナだ。神像にあの御方が現れているなら、まして人間に現れていないわけがないだろう？

あの御方は、人間活動をするために人間に化身なさる——ラーマや聖クリシュナやチャイタニヤ様のようにね。神の化身を想うことは、神を想うことなんだよ」

ブラフマ協会のバガヴァン・ダースが来た。

聖ラーマクリシュナはバガヴァン・ダースに向かっておつしやる——

「見神者たちの説いた宗教は永遠の宗教だ。無限の昔から存在して無限の未来に存続く。この永遠の宗教のなかに、無形の神の礼拝も、有形の神（人格神）の礼拝も、あらゆる種類の拝み方がある。智慧の道も信仰の道もみんなある。外のいろんな今流行りの宗教は、しばらく続いてやがて消えていくだろう」